

vol. 01 Seijo Univ.

成城大学学芸員課程ニュースレター

「成城大学学芸員課程 ニュースレター」の刊行によせて

成城大学学芸員課程 小島孝夫

「成城大学学芸員課程ニュースレター」第1号を刊行いたします。昨年3月に刊行いたしましたパイロット版で予告いたしましたとおり、今年度から前後期末を目安に年2回の定期刊行を行います。第1号の刊行に際し、本ニュースレター刊行の経緯と本学学芸員課程の現状とについて記しておくことにします。

まず、本ニュースレターの刊行は本学ご出身のお二人の学芸員の方からのご提案が契機となりました。本学OBで博物館に勤務する篠原聰氏と吉井大門氏から、成城大学出身学芸員の連携と後進の育成に役立つような情報交換の場を作れないかというご提案があり、このことを実現するために学芸員課程委員会で協議を行い、お二人を含めた編集委員会を設けることで、作業を開始することになりました。

このように書くと唐突に始まった計画のように感じられる方がたが多いかもしれませんので、次にそ

の背景を理解していただくために本学学芸員課程のことを補足いたします。成城大学の学芸員課程は、昭和48（1973）年に文芸学部に開設されました。35年間に3200余名におよぶ学芸員資格取得者を輩出してきました。また、このなかから学芸員や教育委員会で文化財保護行政を担う職員が毎年誕生しています。文化庁の文化財調査官や国立歴史民俗博物館に勤務する方がたをはじめとして、全国の都道府県立・市区町村立美術館や博物館に優れた人材を送り出してきました。一方で、美術館系と博物館系とに学芸員としての進路が大別されるため、博物館等で勤務する卒業生間の連絡や連携をよりとり易くするための課題について、歴代の学芸員課程委員会で検討されてきました。これまでにいくつかの試みがありましたが、直近の事例では10年ほど前まで、美術館・博物館に勤務する方がたに大学にお越しいただき、情報交換会が開催されていました。



CONTENTS

§1- 「成城大学学芸員課程NL」の刊行に寄せて  
成城大学学芸員課程  
小島孝夫

§2- ミュージアムを外から考える 第2回 あつぎ郷土博物館 館長大野一郎

§3- 学芸員課程カリキュラム

§4- 編集後記

☞ この試みは幹事を交代しながら数年間継続しましたが、現在まで休会状態になっています。お二人のご提案はこうした状況を危惧してのことでした。この提案は10数年前に、当時の学芸員課程委員会と情報交換会の実現にむけてご尽力いただいた幹事のみなさんが蒔いた種が芽吹いたように感じられ、当時のことを知る者の一人として感慨深い事でした。

このことに加えて、学芸員課程は文芸学部に開設されておりますが、将来は教職課程と同様に全学部を対象に開かれていくべきではないかという意見があります。そこで、学内外を対象に本学の学芸課程の現状や課題をひろく学内にむけて周知する機会を設け、全学的な展開を図れないかという模索も続いておりました。学芸員の仕事は、資料や作品をとおして人と社会との関係を分析したり、資料や作品に籠められた時代や社会の成りたちを文化的文脈のなかで明らかにしていくものです。社会が混沌と分裂を迎えつつある現代において、学芸員の資質を有する人材が果たす役割は今後一層、必要となっていくことが予想されます。さまざまな学問領域の学生が学芸員課程で学び、文化行政等に携わる人たちがさらに増え、より強い縦と横とのネットワークを創りあげていくことができれば、現代社会の課題について粘り強く考え続ける仲間を増やしていくことができます。本ニュースレターは、こうした可能性も求めて刊行されました。

ミュージアムを外から考える 第2回

# 「博物館とは何か」を問いかける

あつぎ郷土博物館 館長 大野一郎

## 2019年1月、厚木市に新しい博物館がオープンします。

30年近く前、厚木市に新しい博物館を作るため、私はこの仕事につきました。残念なことにこの時の計画は着任直後に頓挫してしまいましたが、集めた資料、データをもとに、図書館の旧施設を利用した「厚木市郷土資料館」を1998年に開館しました。

以降、20年間、博物館活動を行ってきましたが、開館当初は、隣接する平塚市博物館が提唱していた「市民参加型」「放課後型」と称する地域博物館が全盛で、われわれもこのタイプの施設を目指し、展示会の開催、講座、見学会などを行ってきました。

新しい博物館を計画するにあたっては、資料を

集め、保存し、展示など普及活動に供するという博物館の基本が大きく変わることはありませんが、この20年間で変化した点も少なくはありません。これまでの活動をふりかえりつつ、新しい博物館について、記してみたいと思います。

まずは、10年前「博物館とは何か」ということを根本から考えることを迫られたことにふれておかねばなりません。それは、「事業仕分け」と呼ばれた点検作業です。博物館法で社会教育施設と位置づけられ、学校運営と同様、営利を目的としない事業と考えられていた博物館がより厳しく問われ、不要とされる博物館もでる事態となりました。博物館を取り巻く環境は厳しいものとなったのです。☞



【大野一郎氏 あつぎ郷土博物館にて】

☞ 無料が原則である公立博物館の指針は主に入館者数となります。学校教育と連携強化を図ることは当たり前のことですが、厚木市の新博物館が、エアタイト、高透過ガラスなど高規格なケースを具備した特別展示室を設置したのも一つの対応策です。貴重な作品、資料が展示できることは、魅力的な展示会、入館者数に直結するからです。指定管理制度の導入も含め、ますます厳しい目が向けられていくことでしょう。

リピーター確保の観点からは、常設展示を地域の概要が手際よく分かる「基本展示」とし、常設という語を外しました。これは、毎年、展示替えを行うという意思表示。また、「融合展示」という分野横断タイプのコーナーを充てましたが、初年度のテーマは「石」。今後は「木」「火」など大きなテーマを、人文、自然から取り上げていきます。

ユニバーサルデザインの徹底という面で考えると、これまで博物館に来ていない層の掘り起こしも重要なテーマとなります。「触察展示」「ハンズオン展示」と視覚障がい者、幼児、そして「回想法」\*と高齢者など、ソフト面、運営で考える点も多く、大事なことと考えられます。

当館で行ってきた学芸員実習でも、博物館の基本的な機能をカバーできるように、資料の収集・整理・保管、展示、普及のすべてを少しずつですが、体験してもらっています。当館でも古文書解読会、石造物の会など「市民協働」のグループがあります。どんな小さな博物館であっても、この活動を通じ理解者を増やしていかなければ、いずれ行き詰まってしまうでしょう。当館で実習した学生には、そのことを理解してもらい、よき理解者となっただければと考えています。

\*過去に自身が体験したことを語り合ったり、懐かしい道具に触れて昔を思い出す＝「回想する」こと。認知症の予防につながるとされる。



【あつぎ郷土博物館外観】

# 学芸員課程カリキュラム

成城大学で学芸員資格を取得するためには、まず学芸員課程に登録し、各種ガイダンスに出席する必要があります。さらに、①「必修科目」19単位、「選択科目」を2系列以上にわたって8単位以上を修得(詳細は「履修の手引」「学芸員課程」参照)できれば、②学部生は卒業(学士の学位を取得)すると同時に資格を取得できます。大学院生の場合は、①を満たした時点で資格を取得できます。注意しなくてはならないのは、「必修科目」のうち、博物館実習は、学内での講義のほか、学外の博物館や美術館などで実習を行う必要があります。

## 学芸員課程の主なスケジュール

学芸員課程開設学部学科：  
文芸学部  
(国文学科、英文学科、芸術学科、文化史学科、マスコミュニケーション学科、ヨーロッパ文化学科)

3年次で「博物館実習」を履修するためには、2年次のうちに「博物館概論」と「博物館教育論」を含めて必修科目8単位を修得しなければなりません。

1年次

- ・ 学芸員課程登録説明会(3月)
- ・ 博物館学芸員課程費(5,000円)納入



2年次

- ・ 学芸員課程科目の履修登録・履修
- ・ 博物館実習先開拓ガイダンス(11月)
- ・ 博物館実習次年度履修可能者発表(3月)



3年次

- ・ 学芸員課程科目の履修登録・履修
- ・ 博物館実習直前ガイダンス(5月)
- ・ 博物館実習費(10,000円)納入
- ・ 各館園での博物館実習(5月～12月)



4年次

- ・ 学芸員課程科目の履修登録・履修
- ・ 学芸員資格取得者発表(3月)
- ・ 学芸員資格証明書交付(学位記授与式)

### 注意

- 学芸員課程科目のうち「必修科目」については、進級および卒業に必要な単位数には算入されないため注意が必要！。
- 学芸員課程の「選択科目」は、卒業要件科目のうち、「学科科目(\*)」や「自由選択」に算入される場合があるので、よく考えて履修登録してください。\*詳細は履修の手引を参照すること。

### 《編集後記》

▼成城大学学芸員課程ニュースレター第1号発行にご協力いただいた方々には、この場を借りてお礼申し上げます。そして、これからご協力を賜る方々には本ニュースレターをきっかけに学芸員という仕事の一端を学生に少しでも伝えていただければと思います。学芸員という仕事はこれまで雑芸員と揶揄されることもありましたが、近頃は職業としてではなく、属する組織を揶揄してブラックミュージアムという言葉が耳にします。決して携わっている仕事が魅力的なものでなくなったわけではないでしょう。しかし、基本業務に加え地域活性化、観光客誘致、集客を当て込んだイベント、それ以外にも日々の書類作成など、ここに挙げきれないあまりにも多岐にわたる業務による現場の学芸員の疲弊の声とも聞こえます。それでも、調査研究による知的好奇心の刺激、一次資料と触れ合うことの喜び、来館者の笑顔は何ものにも代えがたいものがあります。【編集部】